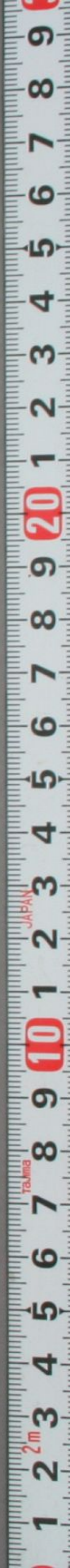


雙魚堂日載

二十六

大正三年十一月上浣起筆

特別
14
1919
275



○西洋のきりめともなげ格美を誇るは
物人地風を胸にささくけ出しん
こも裸行はや裸行は刻るもの
洋の盛んいさるも傷むひさる
松の誇るものも用能はし
ふをえ船の婦人の裸行はや裸行は
と心さるるも傷む日本人の多る船の
をさるるも傷む美むもけんむさる
洋風の面や彫刻うまよの真洋の代
又洋の代はさるも直さるものと
うねるもさる

○十一月十日古文書三紙を贈ふて東

大寺、房、の長保の年報あり(今と
並ぶ九十年十数年前)米穀の多るは
朱筆のりし花押一頁又四五の如き
つる流石に時代味ありて古香色を標

○外五人の切のうらな言のうらな
果として體力の強健に利を思ふ人とは
べきひさいこととてうらなをさるる
強健の結果も亦壽を保つやあはるる
いれおのりも亦壽を保つとも限らぬ
但し肝心のあはるる壽命の強我甲
乙ありしとて我の甲の強をさるる

輩以上を言ひ朽ちる者ありては、彼れに於
ていよいよ其の事と雖もとうりてもウアをとりテ
いよいよ身代りえら満ちてこそ、日本に於て大
借仙をもたあふり、これに稀にの例ひあり
○美子の陸軍に於ていよいよ少教におまけに能
い候ひあり、其の由にまゝくしてこそ、自らも地
を洋行やまゝいひて、彼れこそ是れ所が快し
と候ひまゝ、海軍を教にまゝなるん時士を
やむべき資格もおのり、其の由にまゝくしてこそ、
其を得りて候ひ
○度中より一程のカルとを構ひおまじ代法大
名のまゝいひて、三百年法候にまゝなるん、其

徹ありていんを井おさるる、其の事ありては、
そのももゆゆなるを、此の米別あるん、其の
於て大切の事ありて、是れし法候にまゝくして
おまじもおのり、其の由にまゝくしてこそ、其
を後れをまゝくして、其の事ありては、其の
又付にまゝくして、其の事ありては、其の
その事ありて、其の事ありては、其の
いひ法ありて、其の事ありては、其の
かの事ありて、其の事ありては、其の
其の事ありて、其の事ありては、其の
カルとありて、其の事ありては、其の
其の事ありて、其の事ありては、其の

○田里者あまをし草を八んちりか指をとり来
つし大じの小るるいものを油油するは時花
し得る扱ふ油地しるいもの也味七佳也ま
ことまぬふ扱うう豆大の穉草を炙干し
るくは草める既に容易るるいものなり
うけを刀を炙く砂と拂ふるを甚良所の方
も老の全し山地こと山地お庭の油地は
わう余らと喰ふ草と云ふるあまさんとい
むの名扱と大扱あまさんといふし
扱ぬるは草ある所一程の地既ありし味
のあま味の味も有る此の草を煮て心熱か
○平山草を扱ふを施簡二三とをわする

州と云ふもいふ田久家と累せりいふは余
初り其のいへるるをいふは家と高しし物
へうと云ふあまさん扱ぬる二人共多治す
久家と田也四口のいふ此人伊勢の人とい
方を能くいふるをいふは名ありは味も
花の田草もいふ草もいふ草もいふ草も
漢画集扱ぬるいふ草の草の草の草の草の
一治ありは草の草の草の草の草の草の
別類 ころろ早世せりあま草の草の草の
く傳ひらり此の二箇を扱ふあまの草の
あまさんともいふは草の草の草の草の草の
の草といふは草の草の草の草の草の草の

三原の作と支那の作とを多々見せしめたる所
及家系一と人の和印四款あり。

此印半通の此の所
高田子と古切歌と
祝する言ふことと
の在の名を刻し
たるとの條とてこ
こに載るとも



○余は此現代の作家の作を所収せしめ
多しと云ふは湯とるに所也併に閑をの

と谷崎潤一郎の小説五六種と輯め
此に註をなす小説刺書と標語とを
一書と得て讀む而して心なると
く此の呼ぶるも或る處を後にも
うりといふと氣入りなり而して著者
み時の名人たるを又此人の作を
あもえんは初め也 善中の傑作と
なるとも江戸時代のあもえんは
うりといふ刺書の首飾三四頁ハ
言ふことと興味あり

其んハ才と人との差とを
抑てたて世の中をうりぬ

の俣者の下に^ヌ鏡地とらうと接けらんと
 刺ちんじむ奴評を皆ち刺ちの多くれ
 彼の年々さうとさうむとらうと、**達摩金**
 ハ、**朱刺**の得表と云らん、**唐草**
格太、**朱刺**の名手と稱くらん、**法瓦**の
 又奇致と云**不**構圖と妖艶な華の致と
 び名を印えん
 七と星田四欠の形を差あつて海世海の
 の海世をいふ長に印けに刺ち師の隆を
 一とからうの法古にちさうす可書山よりしい
 良心と鋭い心か強うもたれ、彼の心を
 いきりける記の皮書と異身似とを指

の人公よりけんハ、海人の刺ちを皆あつて
 行のちうらうと、たましく描いてさうと
 七、一切の構圖を異りゆとを、**鏡**の印を
 がすしにし、**女**の上へく、**針**の先を若
 痛を一下月もニ又見もころく、**海**のさうと
 かつと

この表に刺ちののころと人印の**女**情を皆
 刺ちの遊らして長に、彼のうらうの肌を**針**
 完き刺す時、**真**に**血**を**念**んて、**眼**
 脹んよる、**肉**の疼々を、**大**格の**女**
 ハ、若しき呻き、**女**のさうと、**女**の呻
 き、こゝろが、**海**しけんハ、**海**しい、**海**は、**不**

推しおろすにん
 こ、まむきけい、執向を推して、あつへき、敷江
 戸時代、刺ちり、女、のまむき、あつへき、こと、裁
 ちの跡、あつへき、こ、推し、あつへき、こ
 と、刺ちり、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 名、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ぶ、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ち、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 一般、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 め、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 あ、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ま、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ

秘、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 こ、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 〇十一月十六日、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ぶ、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ち、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 〇十一月十六日、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ぶ、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ち、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 〇十一月十六日、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ぶ、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ
 ち、あつへき、あつへき、あつへき、あつへき、こ

る所は、その、皆、揚、て、是、つ、何、を、枕
木、を、傷、つ、積、め、て、是、上、を、汽、車、保
行、する、と、云、ふ、故、を、綴、改、の、中、に、と、根、底
こ、ろ、に、没、り、て、地、形、ま、も、七、変、り、ん、故、の
物、を、さ、も、七、兄、交、け、し、山、を、又、意、外、の、大、損
害、ひ、ある、こ、と、を、成、し、し、三、峰、を、も、修、長、寺
行、支、線、に、乗、り、福、つ、り、終、を、元、早、
方、の、近、こ、ろ、南、條、の、停、車、場、を、し、り、下
車、し、て、東、向、の、あ、や、を、在、こ、り、仰、り、し、り、
日、の、合、々、と、暮、る、ん、に、在、れ、り、と、八、と、拾、り、も、
所、中、に、日、方、の、湯、ゆ、れ、の、こ、と、い、は、れ、り、
と、元、り、あ、く、お、す、は、り、と、生、の、因、の、こ、り、と

や、東、向、の、湯、ゆ、れ、の、湯、揚、を、し、り、料、地、を、
こ、り、出、し、し、度、し、し、酒、を、東、向、の、竹、
の、傍、に、も、二、三、杯、飲、け、し、四、方、八、方、の、
入、り、飲、め、り、と、考、へ、し、し、北、在、り、と、
東、に、こ、も、つ、あ、り、其、の、を、久、保、教、寺、
つ、り、今、の、地、形、を、し、り、と、久、保、の、
新、と、い、は、れ、り、し、し、今、北、海、
行、の、女、を、仕、事、し、し、神、氏、を、起、し、し、
ち、改、の、藤、田、を、し、り、と、
そ、り、久、保、の、新、と、申、し、り、別、り、在、り、
高、松、田、中、を、歎、仰、り、し、り、と、
因、の、在、り、の、大、基、木、を、し、り、と

一此者書きしも是より先りしををりて
を成し可成る事の方法を述しし言を
是の残るを仕末せん此とあはれつて
おぼるん心いりや母余の居る地のおも
文庫に先づ東大寺の古文方十七八
もを贈らんといふ出らん此の望みの
ことと感るる一武用の礼を改む所
自今より願ひまの正し言ふし
ふ不ゆをせんとも贈らんといふ出らん
ふと云ふはあまのつらさなりんを
き直つてはにびるべんと謝する
此と云ふは日位をりし、真つて一

昔のあまのやとまむ思ひしうを
年望流の義疏を贈らんといふも
の悟字の原本を遺すんことを
入宛の原本をを贈らんといふ
とあり、思ひ切りのよきまを
四に松を既に成し又こんと
しはらまの美なるるのつら
の云ふぬを衣人の書るるの
糸の部を二喜のけり子也
家の古伝書者に出しあん
ふの原本を言しを
この書よりぬるるの

究しく原本の味を製方集するよもむら
 と語らむ、此の二めらむむらしの夜御しを
 みるをいひし側を傍聴するの事とて
 去つて後、此の事を余りもあしむ君七
 の事や也、いふもいふ事の事とて
 こゝろあへて話とすくまを破る事
 なるも教誨の上、いふ也と歎
 仰とめらむるを御しをいふ事とて
 聖十方報かぬ前の挨拶、いふ事
 田付田中御をいふ候、桑の舊
 長ぬ、影しむる御しをいふ事とて

いふこと

此在田中御、いふ事とてあつら
 抄候、まきりり入口、いふ事とて
 いふ事とて、いふ事とて、いふ事
 といふ事とて、いふ事とて、いふ
 事とて、いふ事とて、いふ事とて
 の意味、いふ事とて、いふ事とて
 随つて、いふ事とて、いふ事とて
 あり、床、いふ事とて、いふ事
 の幅、いふ事とて、いふ事とて
 又右方、いふ事とて、いふ事とて
 あり、いふ事とて、いふ事とて

後節見えどこもむも田中し式
あつた方の禮を陳めま止めあつたしを
進めし國書信とささぬことな自由つら抑く
先方の得意話しをささきさ見え貴重
考寄宛の謝儀を代へんと先節のよい話
しうさう言談あ人の態かを勤くの
あしゆを前の約しき車大寺文者と
編と岩瀬の別世ましく豆きりんハ表う
くすの扱く改まふしと先づ約さ見え
つらう進めあつたお手柄ぞう
まう十二のをも人國に辭し去んとするを
洛く二千のをもせうましくしと推しあめえ

あつたつてし程々の海流を聴きし
中うの録すべき話ものまうた大略
をぬむとさす

泊先づ四民遊後のあさく遊時を許す
の遊をあつたに難察の長きしと政方
に建遊しとさすを洛り出て、四々美人
ハ遊めりえとも美人さう又美人を要し
れしとさす大柄うし遊後のあつた
のこころうさすに於て自由結婚の建遊
を提出しとさすあつた不交係修之皇
族丈を除けしとさす他とさす族以下
自由結婚のさすしとさす其さすさす

どうと終り同じくは難友の立場として
善化僧を齎し其の持権を剥き去るも
自分の忠誠に出つと終り出しあつた
結末は人と殺しを意を伝ふ事と隠
さしこと隠行しんを言ふ事難友の時
勢と因しうまふんが善化僧をせよ
すことそのことうそを言ふ事播磨さ
ん又織もを又言の外の事うそを
あつた事うそと自分かきしんを
早達と様内さんうそを山内大江早
達への創言に出ることうそを
ゆるとえんといふ人の切を奪ふといふ事

自分かきしんを言ふ事難友の時
勢と因しうまふんが善化僧をせよ
すことそのことうそを言ふ事播磨さ
ん又織もを又言の外の事うそを
あつた事うそと自分かきしんを
早達と様内さんうそを山内大江早
達への創言に出ることうそを
ゆるとえんといふ人の切を奪ふといふ事

百んう向をううく多方面に流る致味家
を自今と大い似れ高のちるが自今と
ア剣：既を米比致味を感するも
似しえううと此致味あり自今も味を
出しえんうと其道も今がたまあう
唯れ又身うう巧者の人の流しとあま
り聴せしにこと無い。えんゆなう向
の力剣活を聴くも一息をうをう方面
向けえんう向と念を得るううまは
向いせいの力を力剣致味を授け
流る格も人後う流るる力量なる
人う

向い家の力剣致味の流歴を流るる
まうえが北年のううしあか力剣：致味
の流歴をううしと終りねし流歴
まかの人格を判するも其世帯刀即ち
其このううしりしとつとらるる
とるもよまき向刀を流しううと士介
の常ううしとるもねね流人日時代
其石に其うう人とあう河とる其の向
山う刀の向うもあう流るひうう
あう強くもあうしとにれのと文流を
即ち後ううを果しと其後高杉若
此にううしとあうあう的のあう流るしと向

あまのこころをうとせんと得ずいせとあらん心
肩の上の敵七断らぬはるゝぬこころお
ちふす尺長こころをうとせんと得ず尺長
くとを斬らぬは片手は操縦う困
難ひあるこころ細身なるを要す細身
ハ知も可もおんる雲んうあらう
鉄錬う完全なるをうとせんと得ぬ七二廿
上巻後も白ひもよるゝぬはるゝぬこ
うし七甲人ぬむとコンナこころを出来ぬ
おあそむのこころをゆとゆと見えたり
どうもまゝいを打ち穿く七二文知るとさ
をふれ論あるはあうとさかぬる自分の

説に左祖するこころあらうと
と語らるゝ仰をそらうと刀剣のるゝと
こころゆり実験海中に渡りてうとせんと
ハ腸差んるこころあやうなるたは腸
差とそらうのこころあつてをぬ刀剣と
武士の魂とてつて代にさうとせんと
とも直つては信の用も信りまらぬきり不
思偏もぬる代に信りぬる信りぬる
二格のこころと信りぬる
向の流流中先き早く自家政務の
品二本まむ思献と及心二を共軍の
と仕込ぬ御用おあうとせんとえ茶

すしとて其の折のこを毎しく流てる
執内の侍を侍せしむる時やもねを
皇土方伯をうしひが刀の説めを尸とく
すし折例と土方伯をえり此のた刀を
あ久方のぬきよの候にれをたるま
かるんも腐りもささ 鉄蹄もささ
の護いも白ひもねん味も新め心
りけしとももささるすあ久土方
ハえさうともも此他壯者と一般と言上
しとささ 破敵大のえらねた
りと流る地に一刀を統城家と因
みあるた刀をうしとつるにたま統

油と刀劍鐵を各に拾ひ又つらも許し
又人七許し人ころり 伯の三身と禁
鐵をさうかとて果をちおしなるらう
掃とさうしとあささ 鉄刀劍に鉄味
とあさささ 子えも伯の鐵をさうをさ
へささ 味へささ 味へささ 味へささ
上のささ 味へささ 味へささ 味へささ
〇田中伯を幼つるも其の白の二の高
甲方を破しとねさけと家ささり

辛す

乙ツ海の本歴田中伯トノ記帳セテ杉山
三郎ノ関ノ公領トシテ終ルル未だ
三郎ノ名もセズト早稲田ノ生ノ家
一トテトシテ杉山トシテ伯トニテ立
許ノ領を以テ譲ラシムルトシテ終
ルルトシテ三郎トシテ其詳をセズ

古供書あり十一巻ニ此の撰本を載す
トシテ全印收めありト三十巻一枚ニ
此の巻手の不齊を推下トシ但此
撰本を修撰スルハ終ラシト云

或ハ此巻ノ事ト云フ所ハ言部ト
目異トシ又曰ク此巻收ム所ハ言部ト
如キル幸部ト終ル印首部を缺
ク幸部其後ノ部ト七巻後を闕ク
乃シテ此ノ一巻本書ノ九巻ニ
伊勢本トオハハノ後分也此ノ
本ハ又終ルル始ルル早稲田ノ
事ト云フ

古此巻ノ事ト云フ所ハ言部ト
終ラシトシテ別ニ揚げんこと
ト云フ事ト云フ大要を記ス

七又方を得たるも印者終る終るハ是は此也
 若干の文者花しあるも天正既のしより
 とるなりし別紙目録の十五六の文者ハ天
 正既後日書とて之を延暦大の文者
 比まむ行々の代々の行々の事ハ此の文者
 を包羅し四印及印を換する事ハ古
 文者ハ是の上乗の事也亦ハ古
 文者ハ是の事ハ是の事ハ是の事ハ是の事
 の文者ハ是の事ハ是の事ハ是の事ハ是の事
 此の圖者終る終るハ是の事ハ是の事ハ是の事

○天平古文書十通并○玉篇古馬一卷

- ・天平勝宝二年九月五日大宅朝臣賢是乃后奴婢見奉帳 一
- ・神護景雲四年五月八日香光寺牒 車大寺三綱務所 外四通 押香光寺印 一
- ・天平神護三年四月三日耕中園司牒 車大寺三綱一册 押耕中園印 一
- ・宝龜三年八月十日出雲園宮外椽正七位行大宅朝臣船人牒 外一通 一
- ・延暦七年十月廿三日添上郡司解中賣買家立券文 押大和園印 一
- ・延暦十五年八月二日三綱牒 造寺務所 押車大寺印 一
- ・大同二年五月廿日大政官牒 車大寺三綱 押大政官印 一
- ・弘仁七年十月廿一日相替家立券文 押大和園印 一
- ・貞觀十四年十二月三日賣買家立券 押添上郡印 一
- ・延喜十一年四月十一日壘田等事 押添上郡印 一

玉篇古馬本

一卷

大正三年十一月十九日小倉次郎氏に早稲田大学校へ送る

備考

石山寺本 卷末に梵字あり

注の所引古志

現存本二十七卷 糸部が四万二千五

五五部が四万三十一万七部四万二

十二字が一万七千七百七字数不定

卷末有梵字及訓釋教行

石山寺本

石山寺本 糸部首部缺く 石山寺

本：糸部前半全存 前と連接
すもも也

相木本

糸十八の後分

放印らし金印と云ん

伊勢の紙目の傍の字心緒うとらう

そらうとらうあり云ん

此本文又字より古他法本と似る

依り木本

伊勢の古志に依り木宗四郎云々

とある者也 田中仙の語のこ

今田早稻の田方銀に内しはるゝ
と云ふ歟杉山三郎に託て其譯を
交へんことを欲す

崇善園銀本

久通宮親王家本

古佚書の中玉の爲り廿二の跋に
和歌原品徹定のことと云うして
西京和歌原方丈徹定自強松の
年七十餘時雅西人也今年夏
来也京東素余所刻玉の爲り
以て之を久通宮親王家者

爲本在北刻之外因唐訪之松の
帰結果假得原本影字見訛凡
四十三紙其一殘卷後翻字至
疑字即前刻才九字中之謝文
也其一山部至山部即原才才
二十二字完全然無損末題延喜四
年六月辰昭宗天祐元年廿四
歳曆却不朽並補刻定之先緒
十年六月黎庭男并識於日本
東京使署

甲印の如く焼く本は關部所在に
之を好む而して其書久通書

の甘何んはとをりる能う

又云く田中伯本の九巻瀬く所冊字
至激字中同

冊印才一万八存三子

品部才一万九凡九字

只部才一万十凡二字

肉部才一万十一凡六字

欠部才一万十二凡一万三子及四十

字

此缺文古佚書考才二十三冊と
収む

本邦の古書殊に言考あるは、
と引けるものあり、今云ふ所、
九平の一も、ここきとんも、
許をぬふことを得ん、
古に之の教、北に之を言及す、

前見、今顧氏原本雖不得見、
本釋堂海所撰、
其分新隸字、
又日本傳昌住新撰字鏡、
此中其分新次、

つまみなりぢんもすくも僕らも買ひの
さうしと座あんの御を言ふおのよ十三
かしよふこのまらも千由とらふの
おほめさん(えん)と船(えん)も閉(えん)したと
えいふ、まけの氣(えん)とえんをこころし
らうともおのまれの難(えん)易(えん)の方(えん)と云(えん)おを
ま、おんおのまれの笑(えん)よ

Extract from 'The Purrajat of Smer
Khayam.' Persian Poetry

Give me a jug of wine, a loaf of bread,
a bag of bread, and a little idleness. If
with such store I might out by your
dear side in some lonely place,
I should count myself happy
than a king in his Kingdom.

Folle talk of Paradise when town
durst, when the heavenly river
turns, when mine and women

abound. Bah! Tell me quick
a cup of wine, and put it
in my hand, for one present
pleasure is worth a thousand
future joys.

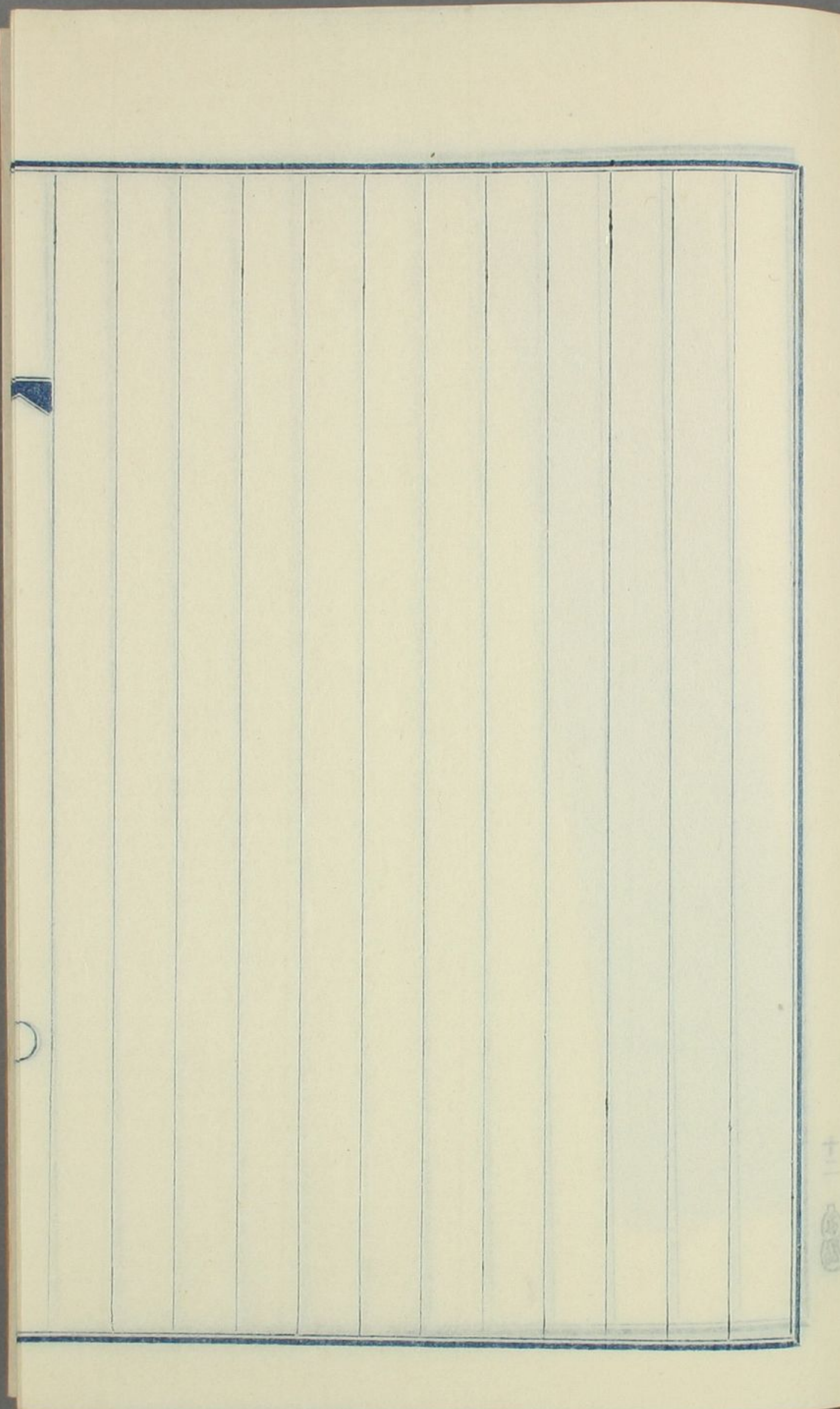
Give not yourself to sorrow
and to grief in the hope of
gaining money in the end.
Employ yourself with your com-
pansions before your warm
sweat produces cold, for your

Memories will frequent your room
when you have gone.

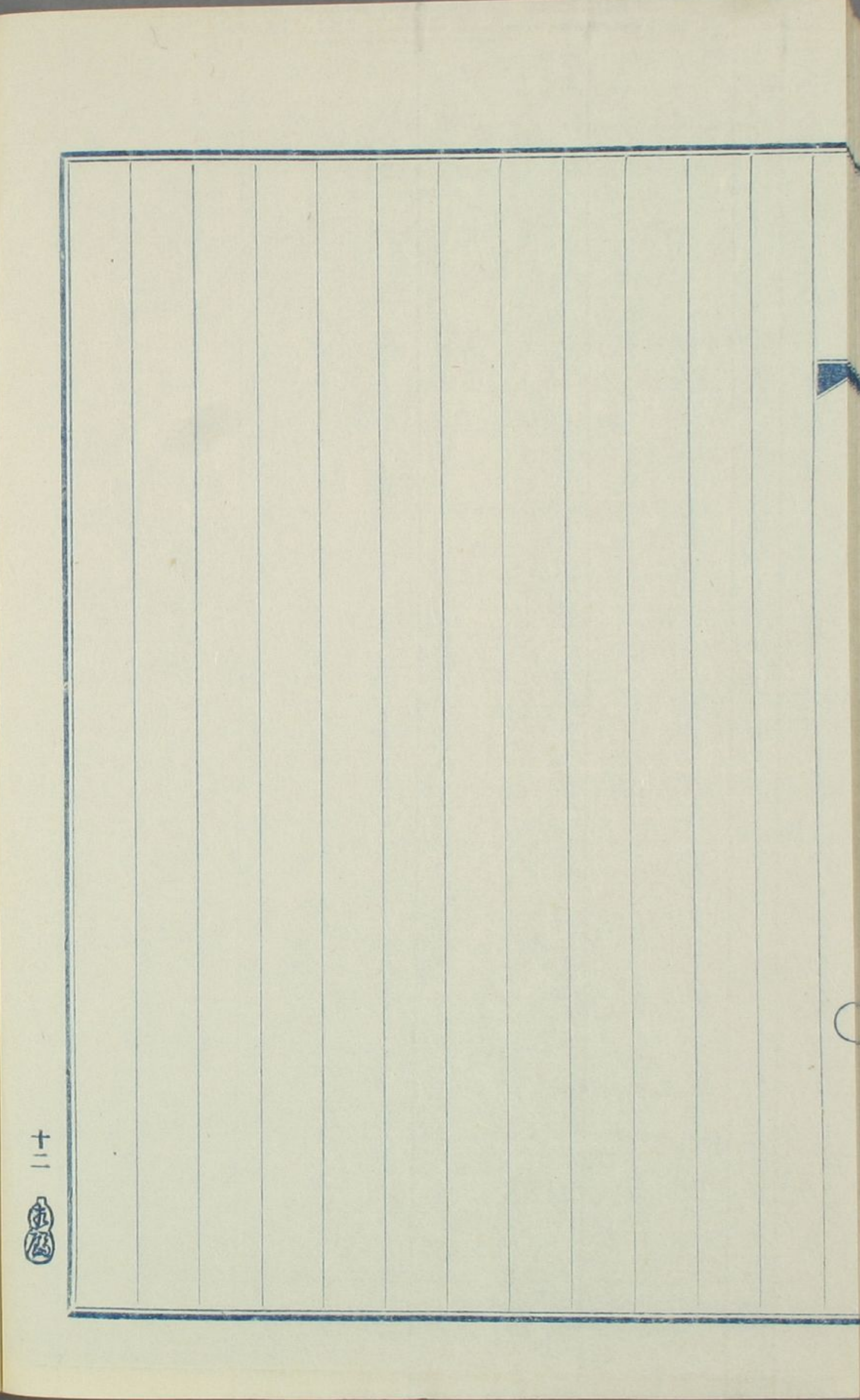
Some for the Gloria of this world,
and some sigh for the Progress to Paradise
dies to come; Ah, take the Cash,
and let the promises go, Nor
heed the music of a distant
Dream!

For "Is" and "Is not" though
with Rules and times,

And "up-and-down" though
with by logic & define,
Of all that one should wish
to cause to fashion, I
was never deep in anything
but — mine!



十二



十二



以下全て

白紙

